



紹介

扇状地の都 —京都をつくった山・川・土—

藤岡換太郎・原田憲一



小き子社, 2024年10月25日発行,
208ページ, 定価2,200円(税別),
ISBN 978-4909782-24-3

「えっ、藤岡換太郎と原田憲一の共著、まさか!？」(敬称略)と目を疑った。いったい、そういうものが成立するのだろうか。やはり世の中は何がおこるかわからない。気持ちを静め、冷静を試してみる。

まず、本書を手にとった第一印象は、「装幀のセンスがよい」であった。カバーのデザインは品良く、全体の印象も薄すぎず、厚すぎず、無骨とは無縁だ。書店で見かければ、手に取って開いてみよう、という気持ちになるだろう。そうして実際パラパラとめくってみると、図版も多く、すべてカラーで完成度が高い。

構成は、はじめにとあとがきの間に、以下の五つの章が収まっている。

- 第1章 地球科学から見た平安京の系譜
- 第2章 災害が京都にもたらしたもの
- 第3章 京都の文化を支えた資源
- 第4章 対談 地球科学から見た京都
- 終章 京都と東京の比較—扇状地が三角州か—

まず第1章では、京都の地球科学的な背景・成り立ちが最新の知見も含めて、解説がなされている。この本の基礎の部分といえる。つ

ぎに、各種災害。扱われているのは、おもに地震、水災害、火災だ。人災も含め、京都のいわば負の歴史が、時系列で丹念に語られる。洛中の「いけず」以外で、京都の負の側面が話題となることは多くはないので、読者はやや面食らうかもしれない。

第3章では一転、京都のポジティブな面が述べられる。豊富で清涼な水、森林、淡水魚・野菜などの生物、陶土、岩石・土砂・鉱物など、千年の都京都の生活基盤と産業を支えてきた各種資源が克明に紹介されている。ここでは資源に付随し、さらにそれらを際立たせる料理人・職人など、人の側面も明確にその重要性が語られる。そして、その職人たちが切磋琢磨を続けられるモチベーションとなってきたのが、都にたくさんいた技をきちんと評価できる目利きの存在である、という視点は大変興味深い。

本書の構成として、終章をむかえるにあたって、第4章で共著の二人の対談が盛り込まれていることは一つのポイントだ。定石通り、前から読み進んできたときの「間」、階段でいえば踊り場のような位置づけかもしれない。軽妙なかたまりで肩の力が抜ける。そこで二人の出会い、本書執筆の経緯、地球科学という学問の特徴、京都が都となった地形・地質的な背景、さらに奈良・大阪・江戸との比較にまで話が及ぶ。ある意味、この対談は全体の要約の役割も果たしている。

そして、終章では、本書のまとめ・総括、すなわち二人の現時点での結論が述べられている。なお、ここでは章題で挙げられた京都と東京だけでなく、大阪・奈良も含め、京都が千年の都となった背景が、地質学の視点から論じられる。

本書によってあらためて気付かされたことがある。京都は資源に恵まれてはいるが、道も四方に通じていたこと。すべての道は京に続いており、京都で賄えない分の資源は、オールジャパンで支えていたのだ。そう、京都は何世代にもわたって洛中に暮らす人々、京都市民、京都府民だけのものではない。都であった千年間、好むと好まざるとにかかわらず、人的資源・物的資源を駆使して周りも支えてきたのだ。

さて、冒頭でも触れたが、評者が知るところ、また論文データベースで検索する限り、この二人による共著は、論文・著書ともにならないようだ。それは、意外なことのようにも思える。第4章で語られるように、1974年に調査船上で出会い、意気投合したわけなので、本書は半世紀越しの最初の共同作業ということになる。

この本の全編を通して、ついに実現した共同作業の喜びに満ちあふれている。ただ、評者には、その高揚感が原因で小さなひずみのようなものも生じているようにもみえる。第4章の対談では、筆が滑るというか、いくぶん口が回りすぎている気がするのだ。例えば、対談冒頭の物理学・化学に対する評価は一面的に過ぎる。わざわざこんなところで、

いわゆる理系の分断を進める必要はなく、なによりもう少し読み進めると、物理学・化学を含め他分野と自由に議論することの重要性が述べられており、実はお二人が異分野交流は重要と考えていることがわかる。また、関東平野の地質学的位置づけについての発言は終章と内容的な齟齬が生じているようにも読めてしまう。これはお二人に共通する旺盛なサービス精神の発露であり、より端的に言い切ってしまいたい、という気持ちを抑えきれなかったことが原因と想像する。

もちろん、これらのことは全体のなかの小さなほころびのようなもので、かつお二人のキャラクターをよくご存じ、または本学会会員のような地質学のプロであれば、筆者らの意図は誤解なく理解できるだろう。ただ、そのような「内輪ウケの本」としてしまえば、あまりにも惜しい。「京都と地質」を考える上で必要不可欠なテキストとして、万人に広く長く読み継がれていくためにも、改版の際にはぜひ小さなほころびを取り繕っていただきたいと思う。

建築史が専門で、文化地質学の分野にもかかんに挑戦している中谷礼仁氏は、以前、領域横断型の書籍が読者を獲得する困難さを表現していた(引用URL)。要約すると「二つの領域にまたがる場合、読者はその全体集合にはならない。むしろ両者の部分集合にあたる奇跡的な読者達なのだ。」となろう。人間の知的好奇心には限界がある。たしかに大きな壁だ。本書はまさにこれに挑んだかたちになっている。全編を通じ、「地質と人文」の領域横断であるからだ。しかし、もしかしたら本書はこの壁を突き破る、もしくは乗り越えるかもしれない。

世に教養の塊のような本は星の数ほどある。ただ、あまりの知識の雨に脳味噌の方が追いつかず疲弊したり、辟易して長く読み進めることが困難な場合も多い。しかし、この本ではそういう気分には全くならなかった。そのからくりが言語化できれば誰も苦勞しないのだが、いったいどういふことか。評者には、蕎麦でいえばつなぎの割合が絶妙、天ぷらでいえば衣のバランスが適切、という表現しか思いつかなかった。この絶妙なバランスを保つことに奇跡的に成功し、さらには半世紀越しの共同作業の高揚感も手伝い中谷氏の語る領域横断の壁を突き破るかもしれない。

今後の京都のあり方を含め、京都の歴史・街のなりたちを地質的に考える際、本書は欠かせない資料となるだろう。また京都を散策する機会が作れたときには、かならずや持参したいと思えるものだ。すでに述べたように無骨とは無縁でかさばらない。ぜひ、お手元に置かれ、具材と衣が醸し出す妙味をご堪能いただきたい。

引用URL

<https://x.com/rhenin/status/1270752519040364547>

(茨大教育 伊藤 孝)